

# 読書メモ 2019年7・8月号

たちばなあきら

橘玲著

## 『上級国民/下級国民』

(小学館新書・2019年8月)

やなぎさわかつひろ

柳沢克央 編

(信州・上田仮説サークル)

2019年8月24日(土), 7月例会用レポート

### ◇はじめに—

前回までの「読書メモ」と同様、サークルで発表することを目的とすると、読書がはかどるので、今回もこのメモを作成しました。自身のため、記録を残すことが第一目的です。みなさま、よろしく(適当に)おつきあい下さい。今までのものと同様に説明あり、引用あり、要約あり、感想ありで諸々が混交しておりますのでご注意を。(私物)と書き添えてあるもの以外はすべて屋代高校図書室蔵書。

7月前半はガリ本『仮説実験授業の将来展望』(ふたつやなぎ書房・7月下旬刊行予定)の編集に明け暮れました。久しぶりのガリ本作りで、毎日が新鮮で楽しく、とても充実していました。直前に私が作ったガリ本は何かと思い出してみると、なんと『私家版・戸田忠雄評論集』(1997年・ふたつやなぎ書房)であることが分かり、自分で

もビックリしています。なんと 22 年ぶりということになります。つくづく、月日の経つのはとても早いものだと感じています。

8 月もあっという間に過ぎました。

◇7 月，8 月に読んだ本

◎橋玲著『上級国民／下級国民』（小学館新書・2019 年 8 月）

○「あとがき」より抜粋。

○アイデンティティ（共同体への帰属意識）は、「俺たち」と「奴ら」を弁別する指標。それに最適なのは「自分は最初から持っていて、相手がそれを手に入れることがぜったいに不可能なもの」。

○「男であること」は、（性転換しないかぎり）女性が自分と同じになれないことからアイデンティティ化し、「女性嫌悪（ミソジニー）」の差別意識を生み出す。

○「白人至上主義者」と「男性優越主義者」がとてもよく似ている理由がそれ。

○現代社会を蝕む病は、脆弱なアイデンティティしか持てなくなったひとたちがますます増えていること。

○私たちが暮らす「後期近代」のとてつもなくゆたかな世界が、知識社会化・リベラル化・グローバル化の「三位一体」の巨大な潮流を生み出し、その勢いはますます強まっている。—この「とてつもない変化」が、先進諸国で同時多発的に同じような「問題」を引き起こしている。

○ポピュリズムとは「下級国民による知識社会への抵抗運動」。

○残された希望は「テクノロジーによる設計主義」だけ。

○貧しい人々の《経済合理的》な行動によって、裕福な国のベーシックインカムは確実に破綻する。

○ベーシックインカムをもてはやす人たちは、世界に膨大な数の貧困層がいることに絶対に触れない。

- ベーシックインカムでは「モテ／非モテ」問題は解決できない。
- もはや誰も結婚せず、家庭をつくろうとも思わない「自由恋愛世界」では、一夫一婦のしぼりは意味を失う。そうなれば、少数の魅力的な男（チャド）が多数の魅力的な女（ステイシー）を独占するようになります。なぜなら、それが「人間の本性」だから。これがまさに、「インセル（非モテ）」が恐れるディストピアそのもの。
- 現代社会で生起するあらゆる現象の根源にあるのは産業革命から始まった「知識社会化」。
- 知識社会における経済格差とは、「知能の格差」の別の名前。
- 知能のちがいが人生に影響しなくなれば「知識社会」は終わり、知能格差によって引き起こされる「上級／下級」の分断もなくなることになる。
- 最終的には「技術」と「魔術」の区別はつかなくなり、知能は意味を失って知識社会は終わることになる。
- 勉強して有名大学を目指すよりユーチューバーの方がずっと人気がある。
- 早晩、大多数の人たちにとって「教育」はなんの意味もなくなる。
- もしかしたら私たちは令和の時代の中に、臨界状態から相転移に至る「知識社会」の終わりを目にするようになるのかもしれない。(234 ペ)

◎小笠原喜康・片岡則夫共著『中高生からの論文入門』（講談社現代新書・2019年1月）

「まえがき」より

- いま一番求められているのは、自分の考えを組み立てる力。
- 本書では、どうしたら自分の関心を見つけ出し、絞り込み、組み立てるのか、その手順を丁寧にガイドする。あまり構えなくても、一通りこのガイドにそって探究すれば、だれでもともかくある程度書けるようになる。
- 2021年から大学入試が大きく変わる。
  - ・一点刻みの点数ではなく、なにを学びたいかが問われる。
  - ・何を知っているかよりも、何を学びたいかが問われる。

- ・一発入試ではなく、高校時代に何をしてきたのかが問われる。
- ・これまでのような短い論文ではなくて、大学のインターネットや図書館を使って、長い論文をその場で書かされる。
- ・討論や面接、そしてプレゼンテーションが課せられる。

ともかく、いままでの大学入試に関する常識は、ほぼ通用しない。もちろんすぐには、この全部が変わるのではない。でも、いまの中学生が大学に入る頃には、こんな感じに変わっているはずだ。

すべての大学がこのようにうなるとも思われない。しかし少し難関の大学、国立の大学なら、ほぼこのようになるだろう。となれば、回り道のようにだけけれども、もっとも有効なのは、あなた自身の探究力・構築力・表現力を磨くのが一番ということになる。

論文を書く探究学習では、さまざまなスキルが得られる。パソコンによる文書作成の技はいうに及ばず、情報検索や正確な引用の仕方など、どんな場面でも役立つ技術がたくさん身につく。自分が興味を持ってこだわることに取り組んでいれば、こうした力は自然とついてしまう。

とはいえ、論文作成はそうした能力を磨くためだけにすることではない。むしろ、あなたが探究的に学ぶ道のり（過程）それ自体が目的だ。論文作成（探究学習）は、今の自分があるべき自分を見つけ、成長するチャンスなのだ。

○私たちはなぜ論文論の本を書いてきたのか。それは、日本の子どもたちに、自分を探し、自分の考えをつくってもらいたかったからだ。自分の考え、意見と活力を持って、よりよく生きようとする人間に育つこと、それが教育の究極の目的だ。学校教育の本来の仕事は、自立した人格をはぐくもうとする、一人ひとりをサポートすること。

○日本の今までの教育界では、いつも個性重視とか主体性を大切にといつてきたにもかかわらず、日本の子どもたちには個性が乏しい。個性や主体性を大切にしていないから、いつも個性重視・主体性を大切にといつてきたのだということにあることをき

っかけとして嫌というほどに気づかされた。

○アメリカから帰国して後、小笠原は論文論の本を書いた。それも、論文とは何かといった大上段からの目線ではなく、学生たちの論文作成を実際にサポートするための本を書いた。幸いその本はとてもよく売れ、今日までロングセラーとなっている。

しかし、はたしてこれで日本の学生たちは主体性を育てているのだろうか。残念ながらそうではないと思う。大学生では遅すぎるというわけではないのだが、もっと前から、自我が伸びてくる中高生にこそ、論文は必要なのではないか。

私たち二人の思いはここにある。大学入試が変わるこの時期に、先生方にも読んでいただき、これからの日本の教育を変えてもらいたい。本書はその思いで書かれた。

(7 ペ)

◎金子勝著『平成経済・衰退の本質』（岩波新書・2019年4月）

いわゆる「点検読み」だけで終了。著者は政府の経済運営についてかなり批判的。

○「バブル経済の頂点のときにおごり高ぶっていたことが原因」とオビにあるが、説明になっていない。「おごり高ぶっている」ということは、具体的には先の見通しを立てずに漫然と過ごしていたということだろう。感情的に誰か具体的な人格に対して傲慢になっていたというわけではないだろう。

○「今だけ」「自分だけ」「カネだけ」という考え方について警鐘を鳴らしている本。このことはいろいろな物事を反省するときに気にしなければいけない視点である。

◎永井孝尚著『世界のエリートが学んでいる MBA 必読書を 1 冊にまとめてみた』

(KADOKAWA・2019年) (私物)

○第 1 章 戦略, 第 2 章 顧客とイノベーション, 第 3 章 企業と新規事業, 第 4 章 マーケティング 第 5 章 リーダーシップと組織, 第 6 章 人, この章立て事態が一つの立派なメッセージになっているから、立派なものだ。

○「まえがき」より...多くの日本のビジネスパーソンは、圧倒的に勉強不足である。

...現場の経験も大切だが、セオリーをキチンと理解することも同じくらい大切なのだ。  
多くの日本人は自らの勉強不足を認識せず、真面目にハードワークをしている。

...まずはあなたが興味を持った本から読んでほしい。分からない箇所は飛ばして OK。  
それでも多くのことがつかめるはずだ。本書を読み終えれば、経営理論は面白く、仕事でも役立つことが実感できるだろう。興味を持った本は、ぜひともオリジナル本にも挑戦してほしい。学んだことは、実務で応用してほしい。現場で理論に基づいて試行錯誤を続けるうちに、短期間で驚くほど成果があがるはずだ。それらはすべて、あなたの武器になるのだ。

◎鈴木鋭智著『AO入試・推薦入試のオキテ 55』（KADOKAWA・2012年）（私物）

○この本は少し前に出た本だが、今後の入試の主流となる「総合選抜」や「学校推薦」で、どのように有利なポジションを取れるかという戦略が満載。とはいっても、特別に奇抜な方法が書かれているわけではなく、きちんとした勉強を積み重ねたせいで最終的に進路実現するということ。具体的な方法はやはり「徹底的にこだわって勉強する」ということ。「自分にしか語れない何か」を見つければ「9割受かる」とある。「自分を知り、相手を知れば百戦あやうからず」ということ。

○8月23日（金）現在、文科省は「共通テスト」に関する具体的な選抜手順について発表していない。どうも「共通テスト」は本気でやる気がないようだ判断した方がよい。となれば、ますます、この本にある勉強を進めた生徒が有利になりそうだ。参考書とにらめっこをするのと同様に、「総合選抜」や「学校推薦」で合格するための勉強＝いわゆる「課題研究」または「探究型」の勉強を進めることが大切だと思うのだが、さて、これからどうなるであろうか。

ひょっとすると、これこそが真の探究なのかも知れない。

◎出口治明著『知的生産術』（日本実業出版社・2019年2月刊）（私物）

## 〔古本市で手に入れた本〕のコーナー

◎茂木健一郎著『脳を活かす勉強法』（PHP・2007年）（古私物）

○「まえがき」より

① 「ドーパミン」による「強化学習」によって、脳を強化する。

② 「タイムプレッシャー」によって、脳の持続力を鍛える。

③ 「集中力」を徹底的に身につける。

本書では、この脳が喜ぶ三つのしくみを踏まえながら、「脳を活かす勉強法」とはいったいどういうものなのか、お話しします。もちろん、脳のメカニズムについても、できるだけわかりやすく、解き明かしていきます。僕の体験などをもとに、脳のメカニズムを説き明かしながら考えてみましょう。

＊

○第六講のまとめ

### 【茂木流・勉強の極意】

☆勉強とは、自分の脳の特徴を見つけること

☆自分の脳の調子（コンディション）を把握する

☆絶好調の時のことを脳に覚え込ませる

☆自分の欠点、弱点を直視し修正する

☆「失敗」が、知的なハングリー精神を培う

☆「失敗」や「逆境」から学び、自分の力に変える

◎堀古英司著『リスクをとらないリスク』（クロスメディア・パブリッシング・2014年）（古私物）

◎陰山英男著『娘が東大に合格した本当の理由』（小学館新書・2008年）（古私物）

◎木村誠著『大学倒産時代』（朝日新書・2017年）（古私物）

◎野村進著『調べる技術・書く技術』（講談社現代新書・2008年）（古私物）

◎石井淳蔵・奥村昭博・加護野忠男・野中郁次郎共著『経営戦略論』（有斐閣・1985

年) (古私物)

#### ◇まとめ・つぶやきなど

○8月の全校集会の後、2年生の教室でついに冷房が運転された。公立学校の長い歴史の中で、高校2年生になってはじめてホームルーム教室において冷房下で学習できることになった生徒も多い。そこで一句。「冷房で・和やか元気・二年生」。

「最後までお読みいただきありがとうございます」〔2019年8月24日(土)13:30,今日は屋代高校の課題探究中間発表大会,茨城,新潟,東京から見学の高校生がやってきた。上田,岩村田からも...。素晴らしくやりがいのある取り組みである〕

